

月刊「神戸っ子」昭和38年5月10日印刷 通巻26号 昭和38年5月10日発行 毎月1回10日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

1963 / 5



monthly magazine kobekko may 1963 no. 26

Hino

共庫日野ヂーゼル
高性能の日野 TEL④1191



■コンテッサ／ルノーのご用命は 神戸日野モーターへ TEL④5771～5 ■

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたの暮らしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です





KOBE
mac
FRIEND
CLUB

「M A C」フレンドクラブ誕生！

このクラブはマックフレンドクラブと称します。クラブマンのあなたには催物その他新らしい企画を優先してご案内いたします。クラブマンカードはM A C でのお買物の都度ご持参いただき、その際お買上金額相当分のチケットをカットさせていただきます。

そしてあなたの口座にご記入いたします。お買上累計高に応じて景品や雑誌「男の服飾」を差し上げたりその他幾多の特典を計画しています。M A C はあなたの服装計画のアシスタントとして常に喜びと誇りを持っています。

おしゃれ洋品の まかづや

マッカ

三宮本店 神戸センター街

TEL ⑧ 0895

トロード店 センター街西口

TEL ⑧ 0896

新開地店 新開地本通り

TEL ⑤ 7688

姫路店 姫路駅デパート

TEL ⑧ 1261



daimaru
神戸店
電話⑧8121



神戸で唯一

〈2階〉

特選オリジナルコーナー

婦人服イージーオーダー

●福富芳美 オリジナルデザインコーナー
センスのある服地を用い、ユニークな感覚をもった着やすいお洋服を仕立てます。

●東レ ブレタボルテ コーナー

サン・ローランの天才的なオリジナル作品
(高級既製服)をあつめて!

●桑沢洋子 コーナー

特に、ジュニアのためにデザインしたおしゃれ着をあつめて!

●森 英恵 コーナー

実用的なデータイムドレスからプレー着までフランス調のいきいきとした、シックなモード!

●ボビーブルックス コーナー

色とスタイルの組合せで楽しむ魅力のアメリカンファション!

神戸と女性

甲にしき(右)・摩耶夏己(左)——宝塚歌劇団花組——

本文52頁参照

神戸っ子にとつて、須磨の海辺は心のふる里です。ステージでいつも、爽快と歌つて踊る、宝塚ジーンヌも、この波うち際には幼い頃への追憶があるようです。塩っぽい風にも足の指にくつつく砂にも、彼女たちの砂に描いた足跡も、寄せる波が遠慮なく消してしまいます。五月の海はたとえようもなくさわやかです。

(カメラ・米田昌弘)



Gem Creation of Mikimoto



ミキモト・ダイアモンド・リング
ミキモトのダイアの指輪をご紹介し
ます。最高級のダイアを使った優雅
なリングです。台は、ホワイトゴー
ルド・プラチナと並ぶ、その美しい
気品は、ダイアと完全に調和します。
ご結婚、ご婚約の指輪にどうぞ。

ミキモト ダイヤモンド リング ¥35,000より

御木本真珠店

神戸店 - 三宮・神戸国際会館
大阪店 - 堂島・新大ビル
本店 - 東京・銀座四丁目



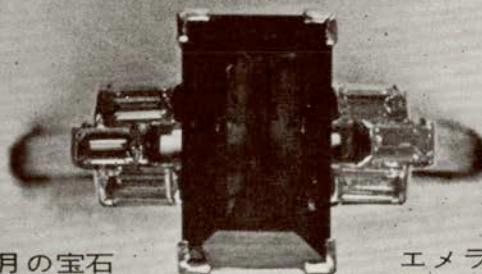


目 次

SECOND COVER / 絵・中西勝	1	39 暮しのアクセサリー② / 暮らしのヒント 矢野有尚
神戸と女性 / 甲にしき・摩耶夏巳	3	41 座談会 / 神戸へ招く 山本土子動物園長・井上水族館長他
グッドナイト・レディース	7	47 ピンクコーナー (T)
—TOR ROAD FANTASIA —稻垣足穂	11	50 アンケート特集 / 私が選んだ観光ライン
連載隨想第九回 / 青葉の五月・白川渥	14	52 宝塚インタビュー / 甲にしき・摩耶夏巳
れんさい随想@神戸のこと手当り次第・淀川長治	19	54 紳士入門③ / 名刺紳士と肩書き紳士 竹田洋太郎・え鴨居玲
連載第四回 / 神戸とエトランゼ いつでもあかるく・陳舜臣	25	56 神戸うまいもん巡礼 / No.9・赤尾兜子
私の好きなスター / 情熱のフラメンコ・清水安子	26	58 ポケットジャーナル
新らしい革袋に新らしい酒を / 赤根和生	28	64 連載第1回 / 神戸夫人・武田繁太郎
野の花対談⑦ / 岡部伊都子・新谷沢子	33	68 神戸百店会だより・ランチタイム
孤独な船 / 伊達俊太郎	35	
既製服を着る / 福富芳美		

表紙／小磯良平・カメラ／米田昌弘・米田定蔵・デザイン／橋昭三

確信をもってタジマの目が選んだ
世界の宝石の名品！



5月の宝石

エメラルド

宝石輸入商

タジマ
TAJIMA SHOJI CO., LTD

元町2 TEL(3) 0387・2552

グッドナイト レディース

— TOR ROAD FANTASIA —

稻垣足穂
え・中・西・勝

紅いクラレットに、黒いスタウトに、金色のスパークリング・ワインに、更にリットル・セアターの舞台の球と六面体から成立った紳士の直角ダンスに時刻は移つて、夜は幼きキリストの手に弄ばれる地球儀の廻転のままに更けてきた。終電車はポールの先から緑色の火花を零して、一日の敗残のともがらを、a、b、q、vの形にクッションの上に収容したまま東西の車庫へ帰つてしまい、神父様は、やおらガウンの裾をまくり上げ、葉付き人参をおしりに差し込んでから、テーブルのおおいを取つて、石膏細工のエルサレムの上に青電気の月光をお當てになる。

棕櫚の葉蔭に純白の胸や杏色の背中や絹張りの臀部やらが、無数のボットウルとグラスに入りまじり、青い光に碎けて魔宮さながらに渦巻いている場所を抜け出して、夕刻に下りてきたアスファルトの坂道を再び山ぎわへとテクって行く時、港の都会の中そらには童貞の月が照つて、街上にはびこる白いものが疎らな星に向つて物云いかけながら、ステップを踏んでいる。いやこれは「サフォ」の作者の云い方だった。ボクは、“Good night ! Ladies”のこの刻限、いつかの映画で観たように、ヴェニスの館の飾りつき鉄柵の門を出でちびくれた石段を幾曲りしてゴンドラまで降りて行つた連中のよう、こちらも縞の仮面をつけ、黒マントーの裾をからげ、ビーター

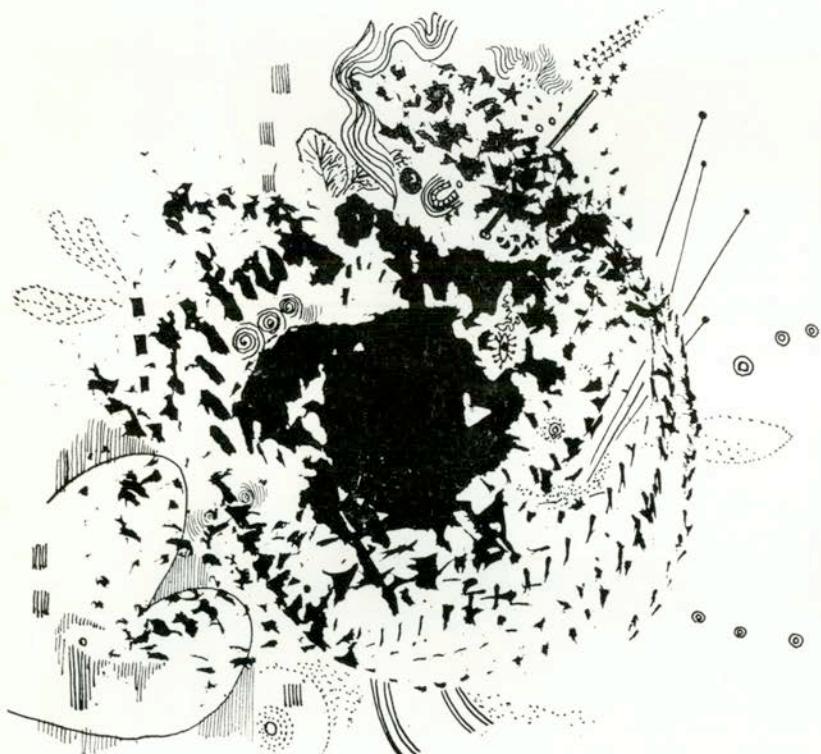
・パンや猫や蜻蛉や道化共と連れ立つて、裏梯子を伝ってモータボウトに乗り移ろうとした時、木星族彗星ボンが近付いている夏至近い深夜の空が、偉いにして曇つていなかつたならば、つまりそこが下町の反映による合歓の花色に染つていなかつたら、こんな折こそわれらの頭上は申し分のない「六月の夜の神戸の空」ではないか、と云いたいのだ。

見たまへ！ 一日ぢゆう責めさいなまれ、こづき廻された海岸寄りの高層建物たちは、さすが重荷にたえかね、嗜み合いの氣力も失せて、互いにゆらめきかしいで、吐息はじりに、眼には見えない放電を交わしている。こんな始末であるならば、裏山の花崗岩の低い垣と鉄柵に閉まれた芝生に、色とりどりの花々に飾られて昼間は狸寝入りをしている十字架や平石たちも、いまは本性を發揮して、一そうだとも、なんでこんな猫被りどもに安眠が許されよう！ 虫も殺さぬ顔をして取澄ました石碑としたことが、相互に顔負けするような吸引と反撥の火花を散らし、ここを先途とばかり彼らの「生」を貪っている。さてかなたに拡がっている水平線は、その左寄りに頻りに雲を焼いてイナビカリがする陸影を載せ、それぞれのケビンから淡い灯影を洩らして放心している大小の碇泊船を散らばらせた港内を前景にして、斜面を占めた危篤市街もろともに、恰もそんな卓上模型を傾けているように、徐ろに東に向つて廻転していたのが、いまは直立してしまつた。いや絶壁になつたのは宵のことで、すでに完全に裏返しになつてゐる。何故なら、赤ばんだ半月が今はこの大テーブルの端っこにおしつけられているからだ。

この逆さになつた盤面に、ぎらぎらまなこのセダンやリムジーンやライトカーが同じく逆様に吸いつき、このような錯綜した面上に縦横に引かれた溝にそうて、格別落ちしないで、せわしげな蟻のように左右に行き違い、はすかいのジグザグコースを探つたりしている。こんな修羅場のさまに引きかえ、ふとこうべを上げて仰いだ処は、まあ、何という事か！ かの暗碧の大空は、この汗ばんで寝苦しがつて、まんまるい地球を抱こうとでもするかのようになつかつて、星々は、その座を乱したのであるまいかと怪しまれるば

かりな、ファンタスティックな物狂おしい位置を採つて燐いている
あの未來派の驍将マリネッティが、「吾等は世界の最先端に立ち星
に向つて戦いを挑もうとする者である」と云つたのは、こんな夜の
ことでなかつたろうか？

ポン彗星が今頃どの辺まで来ているか知る由もないが、あしこに
黄色く光つてゐる土星の内部では、いましも長い髪をつけた哲学者
が分厚い本を閉じてのびをしながら立上り、彼の球形の部屋のドア
をあけて出でると、カント流に両手をうしろに組んで、何やら瞑
想に耽りながら、環の上をあっちこっちに散歩しているけわいがす
る。あゝわれらの六月の夜の神戸の空！



'63. masaru・nakamishi

直輸入

神戸宝石トアロード店

タニジ

日 ③ 二 三 九 休
曜

*センスを生かした商品がいっぱいです。宝石のことなら何でも安心してご相談できる神戸宝石へお立ち寄り下さい



青葉の五月

白川え・中・西勝渥



風光る五月になつた。朝毎に緑輝く季節になつて、私の日課は、先ず朝の庭掃除からはじまる。樟、櫻、笹の類は、いまが葉がわり時。どつさり散つた落葉の始末や、苔の庭の埃払いや、鉢物の灌水などで、時にはたっぷり二時間もかかるが、私にとっては、一日のうち、一ぱん生き甲斐を覚える時間である。

私は四国の山村に育つた。どう言うわけか、幼時から花いじりが好きだった。小学校にはいる前から、親父の蘭の植え換えなどを好

んで手伝つたことを憶えている。そして村人たちから、「子供が庭いじりをするとその家は没落する」などと陰口をきかれたことも。つまり、そんな道楽者の後継ぎでは役に立たぬと言う戒めのようだつたが。……自然是神が造つた、都會は人間が造つたと謂う。後年その都會に住むようになってから山村育ちの私にはこの道楽が、鄉愁と共にいよいよ昂じたようである。

ともあれ、草木禽獸に親しむと言うのは、やはり一種の厭離穢土の性であろうか。が、草木に親しむことの方が、禽獸の場合よりもっと寂かな世界だ。もっと嫌人的だ。

むかし、犬、小禽などを飼つてみたが、動物には人間に近い愛憐がつきまとつて、厭わしく、うるさい。が、植物の場合はそれが淡口である。それもちやんとした園芸物よりも、名無し草の方が、抵抗感が少い。そしてそんな山草野樹の類でも、手がけてみると、比類ない美しさをのぞかせるものである。

わが家庭に、戦前からの碌でもない草木の類がまだ少々生き残っている。信州の羊齒シダ、叡山の杉、丹波の櫻。——すべて、旅の記念に持ち帰つたものだが、二十年も年経てみると、「木心」が知れると言うもの。どんなに忙がしくとも、私はこれらの世話を家人に任せたことはない。樹々にも質素な表情や意志がある。左様、教養ある淑女のような控え眼な意志表示は、長年手がけた私でなければわからない。

——もつと光を。……

と、ゲーテのように咳く奴もおれば、俗物がブリーラに対するチエホフのように、

——いや、水はもう沢山だ。

と、嫌厭の情をたたえている奴もいる。あたかも言葉を知らぬ赤坊にも表情言語があるように、そしてそれを看取することの出来る母のみが、誰よりも子の可憐さを知つているように、私の樹々たちも亦、私でなければ悉なく育つてくれないものようである。

仕事の都合で、時折、夜更かしをすることがある。そんな時、軒をまわると、みんなが月の光の中で清々と濡れていることがある。一瞬、疲れも息むのである。時には、一鉢部屋に持ち込んで、電灯

の下で対面することもある。白昼はそれほどでもなかつた葉面が、夜更けの光線の下では青々と生彩を放つてゐるに、生き物の感がある。草木も眠る丑満時と言うのに、私の樹々たちは犬のように、主の足音で眼を覚ましたか？

眼ると言えば、むかし生野高女の故金光校長から眠り樹の盆栽を貰つたことがある。金光氏はその方で著述のあるほどの盆栽学者貴つた樹は、氏が生野銀山の裏山で見つけたもの高さ十センチほどひどく長つたらしい学名の落葉樹で、葉は愧ほどの小粒の双生。その葉柄の附根から、桃色の簪のよくな花枝を出す。その盛りの頃、夜更けの部屋にとり込んでみて、私ははじめて眠り樹の一種だつたことに気がついた。貰つた翌年の、ちょうど今頃だつたろうか。

二枚の葉がぴたり合わさつて、白い葉裏が向う側からチラとのぞいている。まるで竹久夢二描くところの眠る乙女の瞳と言つた風情なのである。日没と共に、肉眼ではとらえられないほどの息使いで、少しづつ二枚の翔をたたんでゆく。西方に没する日輪と、床の間のこの一鉢とが、はるかなつながりをもつて、正確に日夜の微妙な呼応をくりかえしている哀れさ。書きものに倦んじた夜更けなど——おお、もうグッスリ眠つたか。……

ふと顧みて、声をかけてやりたいような衝動を覚える。が、朝は小鳥よりも早い。草木の寝覚めと言うものは、おそらく地表のいかなる禽獸よりも早いのであろう。

眼まぐるしい世の中である。息つく閑もないほどに、人間の生活のテンポは速くなつた。が、自然は一秒の狂いもなく、ゆつたりと太古のままに運行している。

そして今年も亦青葉の五月が來た。……

(作家)

神戸のこと 手当り次第

淀川長治
え・中・西・勝



だいぶ以前のことだが、シカゴに行ったとき、クラーク街の裏通りの一軒の店から竹ざをがぬうつとつき出ていて、そのさきに「金時」と書いた小旗が吊つてあつた。これにはアラッと声が出た。東京では、きんときと云つても通じない、氷あづきである。思うに関西人が、はるけきシカゴにをいて、邦人たちに故郷の懷しさをしのばせるため売っていたのでもあろう。

金時とくるとラムネと……私の思い出は結びつく。もはや今では映画館の場内もコカコーラかジュースとなつて、昔をしのぶよすがないが夏が近かづくと、このラムネが映画館にはんらんする。客席の間をぬつて歩るくおばはんに「ラムネエーッ」、すると汗ば

んだ手で、大きな竹かごの中のスルメやアンパンやキャラメルのぎつしりつまつた、それはしつこに五本ばかり押しこんだラムネの一本をポンと景気よく音たてて手渡してくれる。泡が吹き出るのを觸んで、あわてて口にして「わあ、なまぬるッ」。

映画館がはねると、そのころは「螢の光」が追い出しの音楽に演奏された。ぞろぞろ客が立ち上ると、ラムネのびんがごろごろ転がって、これが玉の音をたてゴロゴロチリンと足もとの邪魔をするしかしこれがなんとも云えぬ感傷となつて、ラムネと云えば初夏のそんな活動写真館の最終回あと眠むたけな夜の風景が今も懐しい「帰つたら風呂にはいるねんで、このまま寝たら、あきまへんで」そんなとき母によくそう云われたものだつた。

「新開地も、えらい変りましたわ」……昨日、私の小学校友達が東京に帰つてきてそう云つた。白餡のしるこのうまかつた、あの湖月はどうないなつてます？「そんなん、もう、あらしまへんがな」。そんなら鈴亭は？「さあ、あそこまではよう行かなんだが、もう、おまへんやろなあ」。

新開地の入口を浜に向つて左にはいると鈴亭という大衆食堂があつた。ここが私のごひいきだった。家じゅうで出かけるときはキネマ俱楽部前の「奴」の天井。一人で行くときは「鈴亭」のわらじ。今で云えば百円のビーフ・カツか。それが皿からはみ出す大きさでうすくて大きくて、それでわらじと愛称したが実においしかつた。

明石に、^{しようとうかん}松濤館と近安^{きんやす}という魚のうまい料亭があつた。近安にはすぐ目の前の道ひとつへだてた中崎公園の入り海ぎわにもう一軒の出店があつて、初夏ともなるとこここの調理場から客を乗せて船が出た。

縫もうせんを敷きつめて、黒塗りのお膳に季節料理をところせましと並べ、そのうえ重箱まで積みこんで、家族づれが乗りこむと船頭が手なれた手つきで船を押し出す。すると調理場の板の間が目の前からステップとうしろにさがる。その屋形船が沖に出て行く楽しき

にはなんともいえぬ心浮く風情がしたものである。「ほん、あむのまつせ、じつとしてなはれ」船頭がそう云っていたから私の小学生のころであつたろう。沖に出て夕風にあたりながら「うわじまの鯛がおいしい」とか「はもの骨きりが」どうとかこうとか云つているなかを私はたまごの巻き焼きばかり喰べていたのだから思えば欲がない。



生田筋に「エバントイ」商店を出していたころ、初夏になるとヨリカの陶器をしまいこんで、夏らしくイタリヤのガラスものに店の飾りつけを涼しく変える。

ドイツのキュンスト・グラスはそのコップに白い斜めのストライプが美しかった。欽のわくに大きな円形のガラスをはめこんだテーブルがあった。そのガラスのテーブルの下に同じサイズのすりガラスのわんの形のものがついていて、これに水を入れ金魚を放すと、上のテーブルのすぐ下をひらひらと金魚が泳いで美しい。そのすりガラスの下に電燈がつくようになっていて、灯をいれるとき金魚が一層あざやかになつて、それに上のテーブルの円形のまわりのかどがカットされていて、それが下の光りを受けて虹色に光る。それでこのテーブルをレインボウ・テーブルと称したのだが、エバントイの店の小さな奥庭にこれを持ち出して置いてみると、いかにも初夏の夜が美しかつた。

同じくガラスのもので「キッス・ストロー」という妙なものがドイツから来た。ストローがガラスで出来ていて、そのガラス棒のさきに赤いほうづきの玉のようなのがついている。これを唇にあてて吸うとキッスの感しょくがするという。けれど実はその赤いガラス玉はコップのソーダア水のソーダアがこの小さな玉の中で一回転してソーダアの舌ざわりのきつさをそこで柔らげるのである。しかしガラスのストローはこわれる危険もあり一度使つたものをまた洗つて使うのも不衛生なことで、人気はあつたがその後は註文しない今まで終つてしまつた。しかし初夏というとキッス・ストローのあの赤い唇のようなガラス玉が目に浮かぶのである。

(映画評論家)

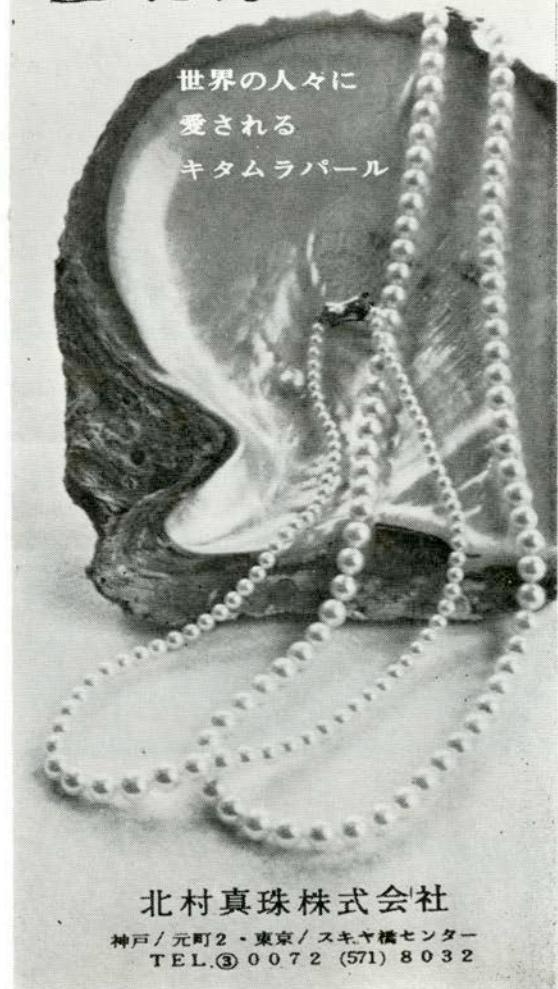
マロングラッセは
ヒロタの銘菓

世界中の人からほめられた
日本の誇り 神戸のほまれ

元町通三丁目 TEL ③二三四〇番

北村パール

世界の人々に
愛される
キタムラパール



北村真珠株式会社

神戸／元町2・東京／スキヤ横センター
TEL. ③0072 (571) 8032

FUGETSUDO

- ゴーフル
- マロングラッセ
- コウベピア
- パビヨット



フランス洋菓子
老舗の味覚

創業 明治三十年

鳳月堂

神戸・元町三 TEL. 神戸 ③ 695・696

O-SHIBATA 柴田音吉洋服店

神戸・元町通4丁目 神戸 4-0693
大阪・高麗橋2丁目 大阪 231-2106

